

来・ぶらり 「クロスラウンジ」が完成しました！！

開学30周年記念事業の一環として附属図書館のブラウジングホールの改修を行い、令和6年3月、新たに「クロスラウンジ」が完成しました。クロスラウンジには旧ブラウジングホールに引き続き新聞や雑誌を設置しているほか、様々なタイプの座席やデスクライト、コンセントなどを新たに設置しました。また、BGM もラウンジ内に導入し、さらに過ごしやすい空間となりました。おしゃべりや食事（軽食）も OK です。皆様のご利用をお待ちしております！！



黒板
メッセージやイラストをカラフルなチョークでどうぞ（誰でも利用可）。



雑誌棚
雑誌棚や新聞閲覧台も新しくなりました!! 新聞のバックナンバーは「新聞配架室」に約半年分を保管しています。



新聞閲覧台



一人用の座席
デスクライトやコンセントもあります。

一人用の座席



黒板

新聞閲覧台

雑誌棚

Big テーブル

中央エリア
テーブル

一人用の座席

ソファタイプの座席

ソファタイプの座席

Cross Lounge



Big テーブル
最大10人掛けのビッグテーブル。
広々と使えます。



中央エリア
テーブル
グループワークにも役立つ
4人掛け、6人掛けのテーブル。



ソファタイプの座席
ソファタイプの座席でリラックスできます。コンセントもあります。
🔌コンセントはこの位置などにあります!

Camellia Vol.13

—図書館広報紙—

「役に立つ／立たない」を超えて——
ビジネスと人文知

【CONTENTS】

コラム：ビジネスと人文知 ……P.2～3

執筆／八重樫先生・金子先生・清水先生

来・ぶらり ……P.4

「クロスラウンジ」が完成しました!!

宮崎公立大学附属図書館

本学の3専攻から、テーマにちなんだ当館所蔵の図書を紹介します。

ビジネスと人文知 —「役に立つ／立たない」を超えて—

言語・文化専攻

—人文学の本質と語学を修得—

准教授 八重樫 徹



「役に立つか」で測れない価値

「哲学って何ですか?」とよく聞かれます。私がよくする答え方はこうです。「当たり前とされていることを掘り下げて問う学問です」。これは「常識を疑う学問」と言い換えられそうですが、私はそうは言いません。常識を疑うことはときに危険なことです。下手に疑うと陰謀論にはまって周囲の人を危険にさらしたり、相手にしてもらえなくなったりするかもしれません。他方で、多くの人が根拠なく信じている「当たり前」を上手く掘り下げて問うことができれば、重要な知見を生み出すことができるかもしれません。何をどのように掘り下げることが大事ということです。

哲学がビジネスに役立つと言われるときにも、哲学が生み出してきた様々なコンセプトとともに、批判的思考のプロセスを学ぶことの重要性がよく指摘されます。大学で哲学を学び、企業の組織開発を専門としている著者による本書も、そのような視点で書かれています。哲学（およびその隣接分野）の古典からキーコンセプトを学ぶことにより、状況を正確に、しかも深く洞察できるようになる。哲学者から批判的思考のプロセスを学ぶことにより、「古い考え方・動き方」を見直し、新しいパラダイムを提案できるようになる。こうしたメリットが述べられ、実際に使えるキーコンセプトとその使い方が紹介されています。「哲学って何の役に立つの?」という疑問を持つ人の多くは、本書を読めば納得することでしょう。

ただ、役に立つかどうかという観点で学問を見ることに対しては疑問を投げかけたくもなります。過去の哲学者の思考の結果として

得られた果実（＝コンセプト）とそこにつながる幹と枝（＝プロセス）を、役に立つと思われるかぎりて切り取ってしまうと、それらの元となっている問い（＝根）と状況（＝土壌）が見えなくなりがちです。しかし、根と土壌にこそ見るべきものがあるかもしれません。また、異なる状況と問いから生まれたコンセプトを、いま私たちが直面している状況と問いにあてはめることは、もちろん有益な場合もあるでしょうが、多くの場合、コンセプトの単純化を含みます。しかし、哲学のみならず人文学というものは、複雑な事象を単純化することを極力慎んで、複雑なまま理解しようとする営みです。だとすると、ビジネスに役立つかどうか、そもそも何らかの目的に役立つかどうかで人文知の価値を判断する態度には、反人文学的なところがあるとも言えるかもしれません。

図書館に
所蔵があります!!



『武器になる哲学：人生を生き抜くための哲学・思考のキーコンセプト 50』
山口周著 / KADOKAWA
〈閲覧室：104 II Y24〉

メディア・コミュニケーション専攻

—メディアと人間の社会行動を研究—

講師 金子 龍司



人文学は社会の役に立つな

以前、金融系の民間団体に勤めていた。14年間勤務したが、残念ながら歴史の研究が業務に役立ったことは一度もない。企業にしてみれば実務の役に立たないのであればどんなに画期的な学術的業績でも存在する意味はない。むしろ社員が企業の与り知らぬところで勝手なことを発言して炎上でもされては迷惑このうえない。よってサラリーマンは余暇であっても文筆活動は表向き許されず、それでも研究をするのであれば自己の所属を隠すなり筆名を使うなりするしかない。

しかし、これっていいと思うのだ。昨今、人文系の学術研究さえも役に立つ／立たないという実用性で社会的に評価され、私たち研究者は強迫的に説明責任があるかのように考えている。しかし、私たちの問題は役に立たないことではなく、この二分法でしか存在意義を主張できないかのように思い込まされてしまうことである。もっといえば、私たち人文学の研究者の本来の役割は、役に立つ／立たないという口車に乗ることではなく、この基準でしか学術研究を評価できない社会を批判することにあるはずである。人文学も役に立つ、と得意満面で語るのは批判精神に欠けた軽薄な迎合以外の何物でもなく、ある場合には有害ですらある。

たとえば、日々業務に追われて身も心も勤務先に絡めとられ、あらゆるハラスメントに巻き込まれて生き甲斐を見失い、役に立たない人間は存在価値がないとする誤った認識に飲み込まれて精神的に追い詰められたビジネスパーソンに、業務外の時間にまで実務に役立つ本を読ませて企業に奉仕させようとするのは拷問でしかない。体のいい自殺助成である。人文学は役に立つのか。私たちはこの問の回答に窮しているくらいだから、人文書こそ彼の休暇のひとときの読書に供されることで彼を苛酷な現実から一時的にせよ逃避させ、人間性の回復に貢献する可能性を持っているはずである。役に立つ人文学とはこの可能性、と

いうより人文学の魂を企業に売り渡すことに外ならない。

言い換えれば、問題は、ハラスメントが横行し働き方改革が叫ばなければならない今の社会に、私たち人文学者が役に立つ／立たないという価値基準をばら撒いてよいのか、このことは、生きづらさを一層蔓延させることにつながるのか、ということにある。役に立つという主張には、役に立たないことに価値を置かないという信仰の告白を伴う。

こうした考えから、私は人文学がビジネスパーソンに擦り寄ることには嫌悪どころか嘔吐を催す。よってここに紹介するのは、サラリーマンだったころ、私を現実から逃避させてくれた、そして当然、実務には全く役に立たなかった一冊である。『政治的なものの概念』。政治的なものとは、友・敵—しかも存在を抹殺しなければならない強度の友・敵の関係にこそあらわれる。あれかこれか、で突き詰めて考えるカール・シュミットは、一時期ナチスの桂冠学者だったこともあって、戦後日本では魔性の政治学といわれることもあった。こうした劇的な古典を欲するほどに当時の私も疲弊していた。



『政治的なものの概念』
カール・シュミット著 / 権左武志訳 / 岩波書店
〈文庫コーナー：311 II Sc5〉

国際政治経済専攻

—世界の政治経済を多角的に研究—

准教授 清水 習



チとビジネス

そもそも「役に立つ／立たない」を超える」とはどういうことなのか?本稿の執筆依頼を受けた時からの純粋な疑問である。この点に関して、ある種ありきたりな答えは教条主義的な、もしくは、啓蒙的なものであり、知識は必ずしも金儲けに企てられるだけではないという話であろう。例えば、「よき人間／よき生」のための知識といった具合である。ただし、その「よき生」の可能性をビジネスとの関連性で話すというのであれば、それはどのような金儲けで「よき生」を送るかということであり、結局は、人生において金儲けをどう役立たせるか、という話である。そういう議論は嫌いだ。実際、人の一生が金儲けのためだけに捧げられるような現代社会において、そういった形で「知の活用」について語ることは意味があるが、本題である「役に立つ／立たない」を超える」に直接的に答えていない。それでは、どのようにその本題に応えてみようか・・・。

フーコーは『言葉と物』の中で、なぜ特定の「知」が特定の時代において「科学」として認識されたのかを議論している。それは、つまり、なぜ特定の科学や知というものが、特定の時代において意味をなすのかの考察である。まさに、『チ。』の世界を考えてくれればよい。中世ヨーロッパにおいては、「天動説」こそ有意義な知であり、それは神が作り出した世界を理解するために、そして何よりその世界で我々がよく生きるために「役に立つ」知であった。しかし、現代においてはどうか?多くの人にとって、「天動説」ではなく、「地動説」こそ意味の

ある知であり、宇宙開発からIT産業といったビジネスにおいても「役に立つ」知なのである。この「地動説」と「天動説」の違い、「チ。」という作品が何を表しているのか?それは、知や科学の正統性、何よりもその知や科学と認識されるものが「役に立つか / 立たないか」の二項対立を作り出す構造の問題である。そして、この構造を理解することこそ「役に立つか / 立たないか」の二項対立を超えて、その二項対立を作り出す次元の地平に立つことができるのである。当然、その地平には新たな知の可能性とともに、新たなビジネスの可能性と新たに知が新たな金儲けに企てられる可能性も眠っているのである。

「え、ちょっと、何言ってるかわからない」って?

つまり、その理解不可能性の地平に学問にとってもビジネスにとっても新たな可能性があるってことさ。



『チ。：地球の運動について 第1集』
魚豊作・画 / 小学館
〈閲覧室：726.1 II U79 II 1〉